

## GIN総研文化サロン

講演テーマ「日本国際社会事業団の活動報告」

講師：（社）日本国際社会事業団（ISSJ）事務局長 大森邦子氏

2002年6月7日、午後2時より 於 平河町マツヤサロン

私達の団体（日本国際社会事業団）は今年創立50年目を迎えます。第2次世界大戦後、進駐軍兵士と日本人女性の間には混血と呼ばれた子どもたちが大勢生まれ、その子どもたちを助けるために在京の日本、アメリカ、カナダの人々がアメリカン・ジョイント・コミッティー・フォー・アシスティング・ジャパニーズ・アメリカン・オーファーズ（日米孤児救済合同委員会）を設立しました（昭和27年）。これは全く民間の団体で、当時の日本は混血の子どもに対する差別や偏見が強かったため、養育困難になった実親が遺棄した混血の子どもたちを、父親の国であるアメリカに国際養子縁組という形で送り出すことが活動のスタートでした。

この活動を知った衆議院議員（当時）の松田竹千代氏（元衆議院議長）が、「これは戦後処理じゃないか。民間でそんなに細々やることじゃないだろう。」と、自らが設立の準備委員長になって、当時の経団連副会長植村甲午郎氏、日赤副社長葛西嘉資氏、日本女子大学教授菅支那氏など多くの分野の有識者を集め、岸信介氏（当時の首相）、橋本龍吾氏（当時の厚生大臣）らと相談をし、昭和34年に厚生省（現厚生労働省）の認可を受けて社会福祉法人日本国際社会事業団となりました。

我が国で最初の国際的な分野でのNGOのひとつであると思っています。日本国際社会事業団、英語名でインターナショナル・ソシアル・サービス・ジャパン（略してISSJと呼ぶ）は、第一次世界大戦のあとヨーロッパで急増した難民、避難民、戦災孤児たちを援助するために設立され、国連の諮問機関にもなっている、ジュネーブに本部のあるインターナショナル・ソシアル・サービス（ISS）の日本ブランチの役割もしています。先日も我が国における無国籍児の問題をテーマにして国際会議を開きましたし、その後、ISSアジア太平洋地域会議、フランクフルトで開かれたISSエグゼクティブ会議でも大きな問題として取り上げられたのは、やはり子どもの問題でした。

今世界中で様々な形で子ども受難の時代に入っております。特に児童労働の問題は深刻です。その原因には今の日本人では想像しえないほどの貧困がバックにあり、世界のいたる所で子どもたちが過酷な労働を強いられております。また一方で内戦・内乱・戦争などの影響を受けるのも幼い子どもや母親たち家族です。そのような子どもや家族をどうやって助けていくかは私どもの大きなテーマになっています。

ISSJの中心になる業務は国際養子縁組と難民の人の援助ですが、難民の人には全くステータスの違う個別難民とインドシナ難民がいます。インドシナ難民は日本政府がベトナム、ラオス、カンボジアから脱出してくる人を難民に準ず

るとして受け入れた人々で、日本への入国許可が出た段階で難民となり、ほとんどの人が定住許可を得ていますので、日本人と同じ保護が受けられますが、個別難民の人は来日後、自ら難民であると日本政府に申し立てをするのでなかなか認定が受けられず、日本政府の保護を受けられないのです。日本政府の難民認定数の少なさは世界的にも問題となっておりますが、それらの人たちの援助もしています。また日本で生まれて国籍確認ができていない子どもたち、無国籍の子どもたち、日本で外国籍のお母さんに遺棄された子どもたちを本国に送還する援助と国際結婚・離婚のカウンセリングもやっています。

さらに国境を越えて別れ別れになった家族の再会、これは驚くことに第2次世界大戦の時に別れ別れになった家族を探して欲しいという依頼が今でもあります。たくさんの混血の子どもたちが生まれた場所である呉市には支部をおいているのですが、今でも混血の子どもたちの支援活動を行っております。

さらにカンボジアに於ける子どもの育成を目的として人材育成プログラムを行っており、ISSJは様々なジャンルで仕事をしています。

これから少しカンボジアのプロジェクトのお話をさせていただきます。

日本は長い間鎖国をしておりました。1853年にペリーが参りまして開国を求め、それ以来約150年です。しかし私達はインドシナ難民の人が日本に入ってきた時が本当の意味での開国だったのではないかと思っております。と言いますのも、それまでに日本に入ってきた人たちは、私達が羨望で涎を垂らしながら見るような生活、暖炉があって、芝生があって、メイドを使って、高級車が出入りするような非常に特別な階級の人たちでした。しかし私達の隣人(となりびと)として外国の人たちが入ってきたのはインドシナ難民の人たちではないかと思うのです。彼らは初めて、私達が耳にしたことのない言葉を話し、そして私達の隣で生活を始めたわけで、本当の意味での日本の開国は彼らが入ってきたほんの20年程前であると考えています。

難民の人への支援をやっていて思いますのは、自衛隊機や船団を難民が多く発生している地域に派遣し、栄養失調になっている子どもや母親、それから病気になっている人たちを日本に連れてきて、日本で病気の治療をし、体力を回復させ、栄養をしっかりとって元気になったら母国に送り帰すという運動をしたら良いのではないかとということです。

その理由はカンボジアに関わるようになって、指導者層、人口のある層が欠落する悲劇を痛いほど感じたからです。今、色々な国で難民問題が起きていますが、国が復興していく時に、ある年齢層・階層が欠落すると復旧がなかなか簡単には行かないのではないのでしょうか。

今日は私達がカンボジアでやっている活動の写真を少し持って参りました。子どもたちの表情は本当にかわいいです。かわいいと言うのは、着ている洋服は破れていたり、裸だったり、汚れていたりしていますが、表情が非常に豊かだからです。

カンボジアではご存知のようにポル・ポトが率いるクメール・ルージュによって虐殺された政財界の人、知識人、教育者の数は百万とも2百万とも言われて

います。

91年にパリで和平協定が結ばれ、日本からもPKOの参加で知られていますが、93年に国連支援の下、選挙をしたという歴史があります。しかし国作りを始めてもまだ問題が収まらず、非常に困難が続いているのはその指導者層の欠落が原因であると思います。

私どもは日本に入ってきたインドシナ難民の人たち（ベトナム、ラオス、カンボジアの人たち）と接するうちに、その国を建て直すためにはやはり国の基礎となる子どもたちを育成しなければならない、そのためには子どもたちを育成する人材を育成しなければならないと考え、その方向で活動を実施してきました。

そんなに大きなことはできないのですが、1歩を始めないと2歩にはならないと思い、実際にカンボジアに行ってプログラムの検討を始めました。

カンボジアは1999年の、あくまで推定ですが、乳幼児死亡率は1,000人に対して105.06人と非常に高いです。平均寿命が48.4歳。それから一人が出産する子どもの数は5.8人と高いのですが、死亡率が高く、育つ子が少ないのが実状です。

そして識字率は35%。これは15歳以上の人で読み書きができる人を数えています。人口ピラミッドは0歳から14歳が45%、15歳から64歳が52%、それ以上は3%です。高齢者は少ないですが実際には非常に年老いて見えます。気候的な要因と、栄養状態決がよくないためではないか思います。日本と比較すると乳幼児死亡率が高く、識字率が低いことがお分かりになると思います。

私たちはこのカンボジア・プロジェクトで、そのプロジェクトを実行するためにデイケア・センターを1996年12月にプノンペン市街のチャムロンパル村という所に作りました。そこはプノンペン市街からは少し離れていましたが、本当に沼地のような、衛生状態も悪く、水道も何もないような場所でした。

都会のプノンペンには住めないが、田舎に行くと働き場がないために、戦争によって夫を亡くした女性たち、夫の暴力から逃げてきた女性たち、夫を殺された女性たち、父親を殺された女性たちなど本当に弱者が集まっている一角でした。

作る時は知らなかったのですが、実は作った後で現地の人から「あそこが何と呼ばれているかあなたは知っているか？」と聞かれて、「何て呼ばれているの？」と言ったら「泥棒の村だ。」と言うのです。結局、泥棒する以外に生業のない人達が集まっているということでした。そこに私達はデイケア・センターを作って「プティアヨニョム」という名前を付けたのですが、これはクメール語で「ニコニコの家」という意味です。ここに来る子どもたちがいつもニコニコと幸せに生きていけますようにという祈りを込めました。

そこで4名のカンボジア人スタッフを集めまして、子どもたちに識字教育、衛生教育、栄養教育をするプログラムをスタートさせましたが、私たちはクメール語が分からない、向こうは英語が分からない中で、片言の英語が分かる一人を頼って、「本当に手まねで、手話をやった方が早いわね。」と言いながら、

スタートしたわけでは、最初はお金を持ってきてくれたのではないかと、物をくれるのではないかと、という期待があったようで、そうではないということを知ったためにはかなり時間がかかりました。

その地域はかつての日本と同じく長老（おさ）が各地域の地区長たちを支配していましたので、その長老のところに行きまして、「私たちは本当の支援をするために、あなたたちが何をしたいと思っているかを知りたいのです。」と、問いかけたわけでは。

そこから話し合いを詰めていって、識字・衛生・栄養教育を考え出し、そのプログラムを少しずつやり始めました。

泥棒の村と呼ばれる地域で、私たちの隣にもNGOがあるのですが、そこには何度も泥棒が入る、でも私たちのところには絶対に入らないのです。非常にオープンにしているのですけれど入らない。理由を聞きましたら、「うちの子も世話になっていて。」と、泥棒を生業にしている人でも子どもたちに教育をしたい、教育しなければ子どもたちがその世界から抜けることが出来ないという意識を持っていると思いました。

私たちは来る人は誰でも良い、一切制限していません。どなたでもどうぞという考えで、オープンなデイケア・センターをやっています。

地域の家を訪ねていきますと6帖程の一間に7、8人家族で住んでいて、更に間借りしている一家がいるのです。そのうえ犬や鶏が走り回っていて、竹串を作る作業場にもなっているのです。この地域の一番主要な産業は竹串作りです。

今日の皆様をお願いしたいのは、焼き鳥をたくさん召し上がっていただくことです。竹串が必要になるように。子どもたちも精を出して作っていき、日本に送り出すそうです。どうか本当に焼き鳥をたくさん召し上がってください。

私たちの活動の中で、一番目標としていることは、子どもたちがまず薬を飲むときに注意書きが読めるようになること、働くときに契約書を理解できること、それから地雷の注意書きがあるのですが、それがきちんと読めて分かること、本気で命を守るための基礎的な語学力、語学といってもクメール語ですが、それを子どもたちに教えていくことです。

加えて命を守る最低限の栄養・衛生の知識の習得を目標にスタートしました。本当に極貧家庭の子どもたちですから、食事もしっかりと食べられないことが多いのです。昼を食べられる子どもは良い方で、殆どの子どもが昼抜きです。

元々体格は日本人に較べれば決して大柄ではありませんが、日本の子どもと比較すると平均3、4歳小柄です。私どもも1週間の間に2回程おやつを配るのですが、大体バナナとビスケットで、それが一番安く買えるためです。

バナナをクメール語でどう書くか？バナナの絵を描きます。最初絵を描くということがどういうことかが理解できなかったのですが、描いてみせて、「絵というのはこうやって描くのだよ。」と言うと皆同じ絵を描くのです。右へ倣え

で、出てきたら皆同じ絵です。自分で好きな絵を描いてご覧なさいと言って描けるようになるまで半年位かかりました。そういう中でバナナを使ってまず字の練習、絵を描くこと、1本と1本で2本になるというような算数の勉強、栄養について教え、食事をする前には手を洗う、手を洗ったらちゃんと拭く、食べ終わると歯を磨くことを教えています。このようにバナナ1本が貴重な教材になっていくわけです。

ビスケットも同じ様に使うのですが、バナナにしてもビスケットにしても殆どの子どもが家で待っている兄弟、お父さんお母さんに食べさせてあげたい、自分も本当はお腹が空いているので、ビスケットを持って少しづつかじるわけです。悩んでいるのが本当に可哀想なほどです。

ちょっとかじって、ちょっとかじって、やっとポケットに入れて「どうするの?」と言ったら「弟に、妹に食べさせたい。」と言います。

私たちの所にも時々赤ちゃんを連れてくる子どもがいて、子守をしているのですが、6、7歳の子どもでも上手に腰をきゅっと捻って赤ちゃんを乗せて見事にケアをします。かつての日本もそうでしたが。

皆子どもはすっぽんぽんで、おむつを着ける習慣はないのですが、合理的と言えば合理的で、おしっこをしても、お水を掛けておき、ただ拭くだけで非常に暑い国ですから済んでしまいます。

誰が連れてきた子どもでも気づいた子がさっさと始末をし、人々の助け合いということが身についているような気がします。このような姿に触れると、貧しいですが心が豊かだと感じるわけで、「豊かさとは何だろう。」と行く度に考え込みます。

「心の豊かさ」についての一つの例をお話させていただきます。

一昨年、私は大学で社会福祉の指導の経験を持つ先生とカンボジアに同行しました。

少し歩行が困難で車椅子を使っていたのですが、私達のデイケア・センターを見学後、多くの子どもたちが働いているシェムリアップのアンコール・ワット、アンコール・トム遺跡にもご案内しました。車椅子なので、階段があると、実際に遺跡を見るのに中に入れないのですが、象のテラスに行きました時に「ここは平地ですから、少し手を添えてもらって、歩いて遺跡の中を見てきてください。」とお願いしました。

「私が先生の車椅子（カンボジアの木製の重いもの）を見ていますから。」と言って送り出しました。すると子ども達が物を売りに来て「1ドル安いよ。安いよ。買ってくれ。」「1ドル高いよ」「では2ドル」「あなた2より1の方が安いよ。」というやりとりになります。いつもそれを買わずにクメール語教室にしていまして、子どもたち20人位を相手に自分1人が生徒で、これが厳しいのです。「数を教えて」というと殆ど同じに聞こえるのですが、「違う、もう一度言え。もう一度言え。」10までやっと数え終わったら。「もう一度1から言え。」10まで言った時はもう殆ど忘れていきますので、仕方なく書き留めて、それを読み上げると「今度はそれを見ないで言え。」と、そのようにして

交流をしています。

その時に、ふっと見ますと車椅子がなかったのです。ハッとした瞬間それを見ていた子どもが「車椅子ね。こっちだよ。」と言いました。反対側に運んでありました。「そこは日が当たるから、あの先生が出てきて座った時にお尻が熱いよ。」私はクメール語が分かりませんし、彼らは英語も日本語も分かりませんから、それをジェスチャーで言ってくれるわけです。「だから日陰に移しておきました」。私はそれを聞いて、心があるということは、本当に何と自然に美しい行為ができるのだろうと感動を覚えました。彼らには、人をいとおしむ心がある。誰からも指示されない7、8歳の子でしたけれど、ちゃんと思いやって、日陰に熱くないように運んで、それも黙って置いておいてくれるその豊かさ、素晴らしい学びでした。

これは日本の子ども達も持っているはずなのですが、それを育てていない私達大人に責任があると思うのです。先に先に手を出して、子どもたちがそういった心を育てる前に、手を掛けてしまうことでかえって子どもたちの自然に芽生えてくるやさしい心を奪っているように思うのです。

カンボジアに行くとき忘れかけた感動が得られます。一度は「車が来たよ。」と言われて急いで車まで行った時カメラを忘れたことに気づき「あっ カメラを忘れた。」と言ったら、その中の一人の子どもが「走れ」とみんなに命令をして、私が歩いた後を探して持って来てくれました。これがないと困るだろうなということやちゃんと分かってくれ、一生懸命探してくれる。私は一瞬カメラを諦めたのですが、きちっと返ってきました。その時も感動で、そうなる子ども達も持っているものを普段は買わないのですが、「買うから、持っておいで、持っておいで。」と言って、こんな大量のお土産になってしまうのです（笑）。

貧しさ、貧困ということ自体は決して人を損なうものではなく、貧しいが故に差別されたり、そこで偏見を持たれたりすることから人々は貧しさをマイナスのものとして背負っていつてしまうのではないかと、カンボジアに行く度に感じます。

子どもたちから買い物をしようと思っても必ず、「今日はこの子がひとつも売れていないから、この子から買ってください。」とお互い助け合うのです。

「兄弟？」と聞くと全然そうではないのですが、子どもたちのグループの中もお互いに助け合う気持ちが行き渡っていて本当に素晴らしいと思います。もちろん良いことばかりではなくて、中にはひったくりにあったとか、ポケットにあったお金を取られたという話も限りなくありますが、それでも私自身はカンボジアに行く度に、子どもたちの心に触れるものですから、更に離れられなくなっているのです。

少し話を戻しますが、私達の所に来る子どもたちは毎日同じ服を着ています。一年中暑いので1枚で済むのですが、洗わないからドロコで、サイズの合わない服を着ている子もいますし、汚れたり、破れたりしているわけです。私たちはそういう子どもたちにも「プティアニョニョム」に来たら、マーケットで



買ってきた古着に着替えさせ、洋服を脱いで裸になったついでにシャワーを浴びさせて、髪の毛を洗い、身体を洗い、少し大きい子どもには洗濯の仕方も教えます。幸い暑い国で半日、一日過ごす間に乾いてしまいますので、帰るときにまたそれを着て行かせるようにしています。洋服を洗うことや身体を清潔に保つということも教えることができるので、それは非常に母親たちから喜ばれています。

以前は学校に行っている子どもが非常に少なく、そういう子どもたちを集めていたのですが、最近学校に行く子どもが増えました。今までは学校に行きたくても、お金を持って行って先生に渡さないと叩かれたり、追い返されたり、酷い待遇を受けていたのです。先生の給料も非常に安くて、大体1ヶ月に25から40米ドルですから家族を養えないのです。多くの先生がバイク・タクシーの運転手などのアルバイトをするわけで、中には子どもたちからお金を搾取したりする人もいましたが、最近その実態が表に出て、禁止されたために、子どもたちは学校に行かれるようになったのです。

しかし、これで問題が解決したわけではありません、次に先生が補修校の仕組みを考え、現在ではそこに行かないと1年から2年、2年から3年に上がる試験に受からないシステムができています。貧しい子どもたちは補修校に払うお金がないので、何年経っても1年生をやっています。

私たちの所でも今までの基礎教育だけでなく、プラスして試験に受かる教育をすることを検討中ですが、まだ実行はできていません。子どもたちには向学心はあるのですが、全員が十分な教育を受けられる環境にないことも事実です。更に私たちは家庭訪問もしております。家族に識字教育、衛生教育、栄養教育をしております。カンボジア人のスタッフが日本から持っていった軍手で上手に人形を作り、指人形でグラフを作ったり、絵を描いたりして教えています。親の世代は国が荒れていて何の教育も受けていないので、母親たちの識字率の低さは驚く程です。そこで母親たちにも子どもたちを守るためには、これを覚えてくださいと指導しています。

更に青空教育と称して、少し遠い所には自転車で出かけ、もっと遠い所にはほかのNGOが出かける時に便乗させてもらい、紙芝居や指人形を持って、車で2、3時間走った所の村に行って、子どもたちに識字教育を、母親たちには栄養・衛生教育をしております。

私たちの所は認められている学校ではないので、いくら来ても学校卒業の資格は取れないのですが、地元の学校の先生がうちのプログラムよりいいから是非見学させて欲しいと言って見に来ます。一緒に運動会（楽しみのない所なので、私達が持ち込みました。）も開いて自転車を使い如何にゆっくり走るかの競争や油を塗った棒に如何に早く上まで行ってお菓子取ってくるかを競う競技などを実施しました。

学校の先生たちも殆どがポル・ポト時代に殺され、現在教えている人たちの中には資格がない人もが多いので、プログラムが良く分からなかったようです。私たちのすぐ近くにある学校では最近プログラムが随分充実してきて、喜ばれ

ております。

私たちのデイケア・センターの中では、子ども達に衛生教育や識字教育を、指人形を使って教えています。ここでは先生たちが全部手作りで教材を作っています。音楽は、先生たちも音楽、楽器演奏というものが全然分からなかったもので、日本からピアノカという楽器を持って行って、先生たちがまず覚え、子どもたちに教えることをやっております。

この写真は家庭訪問をしているところです。

非常に子どもたちの数が多く、フラッシュを炊いているので中が見えますが、実際は入っていくと中は真っ暗で何も見えません。フラッシュを炊くと人がいたという感じで驚きます。非常に多くの家族がこうして生活をしていて、私たちが行くことを待っていてくれます。

これが先程話したプティアまで来られない子たちのための青空教室です。青空教室をやりますと、白い服を着た、学校に行っている生徒も教室から出てきて皆参加してくるのです。先生方もそばで見ている、また今度は何時来てくれるのかという話になるのです。プティアの本来の子ども達は学校に行ける生活レベルの子どもたちとは完全に洋服の感じが違います。

この村の近くにゴミの山があります。このゴミの山で子どもたちが、鉄クズを拾い、生活の糧としています。実は今年5月に癒しのハーブ演奏をする池田千鶴子さんが同行して下さり、子ども達のために何回も演奏をして下さいましたが、ゴミ山の近くの学校で演奏した時、一生懸命に聞いている子どもたちが突然離れていくのです。振り返り、振り返りしながら残念そうな表情で。どうしたのかと思って見ているとゴミを満載したトラックが入って来て、人より先に行って良いものを取らなければならないのです。皆大きな袋を背負ってプラスチックやダンボール、空き缶、空き瓶金具等々漁っていきます。そうして働いても一日の稼ぎは5円10円にもなりません。それでも家族のために、食事のために、学校に行くお金を少しでも稼ぐためにと一生懸命です。皆素手でやっていて、非常にエイズの多い国のため医療器材などが捨ててあると危ないと気にしているのですが、子ども達はお構いなしに裸足・素手でゴミを一生懸命集めています。

この国では女の子は売春婦、男の子は麻薬の売人になることが多く、それはカンボジアだけではなく、タイ、ベトナムなどでも同様です。それを禁止した場合に誰がこの子どもたちの命を、家族の命を守るための食料を調達できるのだろうかと考えます。

「あなたできますか？」と私が問われた時に本当に答えに詰まるのです。数年前の国際的な女性フォーラムの時に、あるバングラディッシュの女性が「売春を禁止しないでくれ。売春以外に稼げない私たちがどうやって食べていくのか。」と叫んだことがあります。私もその場において本当にそういう世界があるのだということは驚きでしたけれど、カンボジアでは子どもたちがそうなのです。

カンボジアは飛び抜けてエイズが多い国なのですが、少女相手だと大丈夫だと



いう風説があるらしく（本当はそうではないのですが）、実際には日本人、アメリカ人、フランス人等、非常に多いです。子どもたちはそれでもお金が欲しいですから、対応していくわけです。いつも戦闘機1機分、軍艦1隻分の予算があったら良いなと私などは涎の出る思いで眺めております。

このプロジェクトを立ち上げる時にカンボジアやベトナムで実地の調査をしたわけですが、その時目にしたのは日本のODA支援の機材が備品のネジが1本紛失したために機能しなくなって放置されている状況でした。日本ではその備品はもう作っていないと言われて、使えない、そういう場面をいくつも目にしました。

また大きな病院で4階以上が使われておらず「どうしたの？」と言ったら、「この国の電気の供給量から言ったら3階までが限度だ。」って言うのですね。日本の政府はどうしてもう少しその辺を考えて援助しないのだろうかと思いましたが、そこはオートマティカルなドアになって、とにかく電気を非常に使うような建物になっていました。

その国の事情を考えた方法があったのではないかと思いました。またある病院に行ったら、梱包されたままの機材が沢山倉庫に入っているのです。「全部日本から来たよ。」と言うので「どうして梱包したまま？」と聞くと「使える技術者がいない。」と言うのです。機材はあっても使えないのです。

そういった場面を目にしますと、私たちは日本のODAでお金が非常に無駄に動いているなと感じました。国際的な支援をする場合には、相手の国をきちんと理解し、その国がどういう方向に行こうとしているか、何を望んでいるかをしっかり把握した上でスタートさせないと、単に自己満足の援助になるような気がいたします。

実際に学校として建てられた場所に私たちが訪れた時には、そこが生活の場や職場になっていました。「ここ学校ではないの。」と言ったら、「学校ではあるけれど、教える先生も教材もない。」という事情を聞きました。

箱物（はこもの）を作っても、それを運営していくお金を援助しないと貧しい国ではそれが機能しないことが起こります。そこまでを考えてプログラムをスタートさせないとお金が有効に活かない援助になってしまうような気も致しました。

日本もかつては、例えば松下村塾、適塾のように世のため人のために働く人を育てるプログラムが随分あったように思うのですが、やはり自分たちが住んでいる国を良い国にしようとして働いていく人たちを育てていかなければいけないのではないかと、日本もそれを真剣に考えなければいけない時期に来ていると海外のプログラムに接していると強く感じます。

日本ではインドシナ難民の人が入った時にそうだったのですが、難民と言えは非常にステータスが低く、「悪いことをするのではないか。」と地域の人たちから拒絶されました。住む場所を探そうと思っても、「誰が保障するのだ。」と言うことでした。

母国で大学教育あるいは大学院で教育を受け医者の資格を持っている人でも、

日本ではその資格を活かすことができません。実際に医者をしていた人でも、今やっている仕事は建設現場で働く仕事です。日本ではインドシナ難民の1万人枠を取り外し家族呼び寄せを認めました。ただし現在でも1万1千人までいったかどうか位でまだまだ非常に少ないのです。

先日訪問したフランクフルトでは、タクシーに乗ると「自分はイラニアンだよ。」と言っておりましたが、きちんとライセンスを持ってドライバーをやっています。レストランに行けば色々な国の人働いています。ところが、日本はいわゆるブルー・カラーの仕事は外国の人にオープンにしませんし、なかなか日本に入ってきて働くのは難しいのが実体です。

しかし、もはやそのようなことを言っている時代ではないという気が致します。少なくとも、母国で資格を取っている人たちには、さらにそれを少し日本で適用できるトレーニングをして活かせるようにするといった形で、考えを改めていかないと本当に日本は海外から取り残されるのではないかと危惧します。現実には多くの日本人たちは向こうで働いているわけですから。

日本は海に囲まれていますので、まだまだ他の国との交流に慣れていない点がありますが、日本人であること、その誇りは誇りとして、日本人でなければ日本に住んではならないとか、この仕事は日本人でないとならないとかいうことではなく、皆が共存できるような世界にならないものかと思えます。

私たちの活動は本当に小さな活動ですが、いつの日かその子供たちが大人になった時に国境を越えて愛の手を繋ぎ合っていけるような世界が来るような活動に持っていきたいと考えております。

拙い話でしたが、ご清聴を感謝申し上げます。